

特集 子どもの運動と心身の発達

## ヨーロッパにおける子どもたちのスポーツ活動と環境

—スイスにある田舎の小学生の半日—

長谷川 聖修 1) 檜皮 貴子 2) 深瀬 友香子 3)

著者 1) はせがわ きよなお (筑波大学) [haseg@taiiku.tsukuba.ac.jp](mailto:haseg@taiiku.tsukuba.ac.jp)

2) ひわ たかこ (駿河台大学)

3) ふかせ ゆかこ (目白大学)

ロダン作の「考える人」は最も有名な銅像である。これに「私たちは長く座り続けている。これは体にとって負担だ！」というコピーをつけて、動くことの重要性を説いたのが、Urs Illi<sup>2)</sup>である。彼から、次のようなラベルを貼ったワインをいただいた。このイラストは、長時間、子どもたちが学校教育の場面で座位姿勢を求められるライフスタイルを批判するとともに、いわゆる研究者と言われる人たちが醒めた目で調査はするが、なんら具体的な提案をしない現実を強烈に皮肉っている。そして、ラベルの下には...UND DIE UMSETZUNG「それで、どうするのさ」と記されている。



日本においても本誌の特集のように「子どもの運動と心身の発達」がたびたびテーマとして取り上げられてきたが、深刻なデータの提示や抽象論ばかりで、その現実を変えようとする情熱を持った具体案をほとんど見たことがない。

運動が子どもの心身の発達に必要であることはもはや常識である。しかも主体的で多様な運動経験が絶対条件である。子どもに運動が必要であるという意味のない検証作業を終えて、どうしたらテレビゲームに負けない魅力的な運動とアクティブなライフスタイルを提案できるのか、その具体策が今こそ求められている。

ワインのラベル図は、日本の研究者の姿とも重なって見えるのは筆者だけだろうか。

1990年代にスイス体育教師連盟の Urs Illi が提唱し、ドイツ語圏において発展しているプロジェクト「Bewegte Schule(動き豊かな学校)」を調査する機会を得た。本年まだ雪の残る3月に、この活動のルーツとも言える実践現場を視察した。そこは、本プロジェクトのモデル校のひとつである Diessenhofen 小学校。そのユニークな活動の様子はビデオとして紹介され、ヨーロッパの教育事情に大きな影響を与えた。

本論では、どのような特徴を持つ学校なのか、一人の生徒の視点に立って紹介したい。

僕の名前はペーター。スイスのボーデン湖畔にある小さな小学校の3年生。今日は、クラス担任のスージー先生から「日本から来たハセガワというヒゲの先生を駅まで迎えに行つてね」と頼まれた。初めて会うので「Herrn HASEGAWA Willkommen (ようこそ 長谷川さん)」と書いた大きな画用紙を持って来た。友達のミヒヤエルも一緒だ。列車から飛び降りてきたヒゲ先生は、名前を書いた紙を持った僕らを見て凄く嬉しそうだった。笑顔で挨拶をしたら一緒に歩いて僕らの学校にお連れした。

教室に入ったヒゲ先生は、スージー先生と15年ぶりに再会したとのこと、顔をくちやくちやにして抱き合っていた。15年前ならば、僕らはまだ生まれていないよ。そんな昔にこのクラスに日本から来ていたなんて、変な東洋人だな。

8時半、教室での授業が始まった。まずは教室の前のスペースに集まる。そして、円になって歌いながら、みんなでリズムに合わせてステップや拍手をする。ヒゲ先生は、みんなの許可を得て、写真をパシャパシャ撮り始めた。僕らはこうした先生が来て、授業を見られることは慣れているから平気さ。しかし、世界地図の右端にある遠い国から来た日本人は初めてだ。

動きの途中で先生が課題を読み上げると、これに合わせて、歌詞を変化させながら歌うのさ。例えば、先生が「bin」と言えば、動詞の変化型。ich bin ♪ du bist ♪ er ist ♪. 「なんでこんなことするのか?」って。それは簡単さ。頭だけ使って覚えるのは大変だけど、体全身を使って遊びながら覚える方が楽しいよ。それに、動きながら覚えてしまえば忘れることはないよ。もし忘れても体がちゃんと覚えているから動き出して歌えばすぐに思い出せるしね。最近、チョコからきたミランのようにドイツ語をまだ上手にしゃべられない友達が多くなっているんだ。だから、スージー先生も少し苦勞している様子。この歌遊びは楽しみながらドイツ語の文法を学ぶのにはとてもよい方法だと思う。

いよいよ机について書き取りの授業が始まった。ぼくらの教室にはふつうの椅子はひとつもないんだ。その代わりに、体重が300kgの人が乗っても破裂しないしっかりとしたGボールを使って座る。ヒゲ先生に聞いたんだけど、日本人は時々床に座わるんでしょ。僕らも同じようにボールの上で正座だってできるよ。立って片足だけボールに乗せながら勉強するんだ。Gボールをどう使うかは僕らに任せられてるから、





どんな姿勢で学ぶかは自分で決める。意地悪な友達は、座っている僕のGボールを蹴飛ばして僕をGボールから落とそうとするんだ。でも、そんなこと慣れているから、さっと蹴り返して落としてやるんだ。気持ちいいよ。

それじゃ落ち着いて勉強できないじゃないかって心配ですか。まったく問題ないですよ。こうして僕らは1年生の時からずっと学んできたので、学ぶことはじっとしてすることだとは思っていません。つまり、静かに座っているより動いていた方が意識を集中できるんだ。

但し、約束事はあるのさ。それはスージー先生が指を鳴らして手を挙げたら、必ず活動を止めて先生に注目すること。この約束事ができなければ、生徒はそれぞれが勝手に動いて、きっと授業はめちゃくちゃになっちゃうものね。

今度は文章の読み合わせ課題。教室のスペースをどう使うかも自由なんだ。自分の机から離れて二人組でそれぞれに自由に分かれてできる。だから、日本人のように床に座ったり、立った

ままの友達もいるよ。僕は先生の机の下に潜って読み合わせをするのが大好き、だって友達の声が良く聞こえるし、なんか隠れ家みたいでワクワクしちゃう。



クラス全体への読み上げる課題は、バランスボードに乗って落ちないようにするんだ。両足で簡単にやっていたら「片足でもできるかな？」とスージー先生に言われて挑戦してみたんだ。結構難しかったけど、読み終えるまで一度も落ちなかったからほめてもらった。とても嬉しかった。

次は僕の苦手な算数だ。でもいつも夢中になって取り組んでしまうんだ。スージー先生は、こんなことを黒板に書いてくれた。

算数のテキスト 56 ページの課題2ができればトランポリン遊び、課題4ができればペダロ遊び、課題5ができれば回転板遊びができますよ。

よし！とにかく、早く遊ぶためには、しっかり算数を頑張らなくちゃ。





課題2に合格した人から、「トランポリン遊びをどうぞ」とスージー先生が言ってくれた。



ピョンピョン跳ねるのはどうしてこんなに楽しいのだろう。なんだかワクワクしちゃうよね。

さあ！気分が変わったら課題4に取りかかろう。算数の課題が終われば、素敵なプレゼントが待っているんだ。勉強にも集中するし、遊べば、気分もリフレッシュ。算数の時間なんだけど、外から見たらまるで「遊び時間」のように思われるかもしれないね。

課題4の合格でできるペダロは、板と滑車がついている簡単な乗り物さ。だけど、これが結構難しいんだ。友達のみヒャエルは、怖くて、黒板のチョーク置きを頼りにしなければまだひとりでは、移動出来ないんだ。でも、夢中になって挑戦しているので、順番待ちしている次の人がすぐにできないとちょっと不機嫌な様子。でも横取りするような友達はひとりもないよ。



最後の課題5がクリアできれば、回転円盤に乗ってグルグル回り。しっかり円盤を持ってないと飛ばされちゃうからもうたいへん。でもこのスリルがたまらないんだ。遊び方も自由。だから、二人組になって、コマのように友達をまわしてあげることだってできる。超高速回転を味わえてもう最高だよ。





終わってからも頭も体もフラフラになって、これがまた楽しいんだ。まるで、空を飛んでいる気分を味わえる。

この回転円盤、家にもあったら日本製のテレビゲームなんかしないかもしれない。

スージー先生は算数のできる子にばかり注意を向けているわけではないんだ。算数の課題でまだ数の考えた方がわからないギリシャからきたイオスには、数の大小を形で表すわかりやすいおもちゃを使ってひとつひとつ丁寧に教えてくれるんだ。ヒゲ先生が日本の小学校は1クラスに30人から40人も生徒がいると聞いてびっくり。僕らのクラスは17名だから、算数が少し苦手な生徒にもゆったり指導してくれるんだ。



教室での最後の授業は人間カルタによる「神経衰弱」遊びで締めくくりだ。

二人の鬼は廊下に出ます。その間に二人組で互いにポーズを決めてばらばらに座るんだ。ゲームは簡単さ、教室に入ってきた鬼は一人ずつ指名する。指名された人は自分たちで決めたポーズを示す。鬼はそれぞれのポーズを覚えて、同じポーズを探したらその二人を並べてポーズが同じであることを確認するのさ。面白いよ。日本のお友達にも試して欲しいな。



さあ体育の授業だ。街の体育館まで出かけよう。出かける前に、掃除が楽なようにGボールは机の上に置いておこう。



スイスの小学校には体育館はないんだ。もちろんプールもない。だけど、街のスポーツ施設は立派なものがあるのでそれを利用するんだ。

体育の授業が終われば、午前中で学校はお終い。ヒゲ先生は7月に定年を迎えるスージー先生とボーデン湖畔のレストランでランチを楽し

むんだって。ヒゲ先生また来てね。チュウス！

1994年の春まだ浅い日、スージー先生の当時3年生のクラスを訪れた。その様子は、教室では子どもはじっと座って学ぶものと思いついていた筆者にとって、まさにカルチャーショックであった。動きながら学び、学びながら動くという姿は、長い人類の歴史においては普通のことではなかったはずである。

それ以来、筆者の研究室には椅子はなくGボールに乗ってこの原稿を書き（もちろん今も）じっと同じ姿勢でいることを拒否する生活を実践している。微力ではあるが、NPO 法人日本Gボール協会を立ち上げて、その理念の普及にも奔走している。

残念であるが、日本ではGボールに座れば集中力が高まって学力がつくというふれ込みで新聞やテレビで話題になったことがある。表面上の効果性だけを取り上げても全く意味がない。つまり、人間は今も昔も変わらず動物の一種であり、知的学習に重きを置きすぎて、明らかに生き物としてのバランスを逸していることこそが問題なのだ。Bewegte Schuleの最終的なねらいは、「Bewegung ist Leben（動くことが生きること）」という基本をじっくりと学ぶことである。

動き豊かなスイスの小学生の暮らしぶりに触れて、世界の「幸福度ランキング<sup>注1)</sup>」の第2位にスイスが入っていることの意味を確認できた。日本がそのランクで90位であることは現実である。動き豊かに暮らそう！。

なお、本報告は、科研費：基盤研究(c)「ドイツ語圏の学校教育におけるBewegte Schuleの実情と課題について」課題番号20500557の補助を得た。記して謝意を表す。

【国際連合教育科学文化機関 (UNESCO)、英シンクタンクのニューエコノミクス財団 (NEF)、世界保健機関 (WHO)】などのデータを分析し、世界各国の幸福度をランキングした。医療、生活水準、基礎教育を受ける機会に関連した経済的要因が、国民の総合的な幸福感を決定づけていると報告書は結論する。医療費無料制度、世界最高水準の国民1人当たり国内総生産(GDP)、高い教育レベルなどの理由で、第1位にデンマークが選ばれた。2位スイス連邦、3位オーストラリア共和国、23位アメリカ合衆国、90位日本(分析対象国:178か国)

#### 参考文献

- 1) 長谷川 聖修：ころべ 子どもたち！-体操ボールの理論と実際、ブラザージョルダン社、1998.
- 2) Urs Illi, "Bewegte Schule", Sportunterricht, Verlag Karl Hofmann, 1995.10
- 3) 池田 延行・長谷川 聖修：乗って、弾んで、転がって！ ちゃれんGボール、明治図書、2010
- 4) ヴァイゼッカー：ゲシュタルトクラス、みすず書房、1975.
- 5) ハーバード・ビジネス・レビュー編集部：幸福の世界地図、Harvard Business Review 2007年06月号

注1) 2006年、英レスター大学の社会心理学分析の研究者エドリアン・ホワイトは幸福の世界地図 The World Map of Happiness を発表。約8万人に聞き取り調査を行った各種国際機関